

## 第 40 回 2025 年度交通権学会研究大会（報告）

第 40 回 2025 年度交通権学会研究大会は、2025 年 7 月 12 日（土）・13 日（日）に名古屋市内で地元会員の実行委員会により開催したので、その概要を報告します。開催場所は、12 日は、名古屋都市センター11 階ホール（中区）、13 日は労働会館東館2 階ホール（熱田区）で、参加者は、12 日が 55 名（内会員 22 名）、13 日が 38 名（13 日のみ参加 9 名）、延参加者数は 93 名でした。

第 40 回研究大会は、「中部圏域では、南アルプス付近のトンネル工事に伴う湧水による水資源問題、岐阜県瑞浪市では工事による湧水による水位の低下のほか地盤沈下が進んで工事は止まっている。岐阜県可児市では、地上走行計画に伴う環境・景観問題や地域住民への騒音など健康問題、さらに火災避難施設を建設することが表明されたが、隣の中津川市とともに人災・自然災害に対する防災対策への対応の不備が指摘されている。このような状況のなか、2025 年度研究大会では交通権憲章にある「安全性」、「環境保全の尊重」「整合性」など交通権の視点からリニア中央新幹線について「リニア中央新幹線と交通権」を統一テーマとして開催する」こととしました。

青木会長の開会あいさつのあと、基調講演「環境影響評価から見るリニア新幹線と環境保全」中川武夫（中京大学名誉教授）、基調報告「岐阜県瑞浪市で進む水枯れ、地盤沈下～リニア環境破壊報告」井澤宏明（ジャーナリスト）が行われました。その後、講演者と報告者をパネラー、コメンテーターとして桜井会員（日本大学名誉教授）によるパネルディスカッション「リニア中央新幹線と交通権」が安藤会員（埼玉大学名誉教授）による進行で行われました。会場からパネラーへの質問にも答えました。

その後、学会会員総会を行い、来年度は 40 周年記念大会として首都圏で開催をすることとしました。また、懇親会を四川菜園 金山店で 21 名の参加で開催をしました。

2 日目は、自由論題報告として各報告 20 分・討論者による討論と質疑を次のように行いました。以下、テーマ、報告者、討論者です。

- ・ 「続：民間航空がリニアに与える影響」中川明（航空労組連絡会）・香川会員
- ・ 「リニア新幹線と交通権」可児紀夫（愛知大学地域政策学センター）・桜井会員
- ・ 「交通権の思想の誕生」下村 仁士（鉄道インサイト）・青木会員
- ・ 「交通権と憲法～法学者の取り組みの現状と課題岡崎勝彦（島根大学）・近藤会員
- ・ 「利用者アンケートからみた JR 東海における交通権保障のための課題」安藤陽（埼玉大学）
- ・ 「インフラ維持管理における民間資金の活用手法」香川将美（みずほリサーチ&テクノロジー（株））下村会員

- ・ 「人手不足時代において住民の足を確保するためには何が必要か」近藤宏一（立命館大学）風呂本会員

最後、閉会あいさつとして、来年度は交通権学会 40 周年記念大会に向けて準備を進めることを会長が述べ閉会しました。

第 40 回研究大会の特徴は、これまで大学を会場に担当教員が準備をしていただきましたが、今回は地元会員による実行委員会により手探りの大会でした。また、大会にはできる限り会員以外の幅広い方々の参加を呼びかけ、地域の課題を幅広く議論ができるように準備をしました。統一論題についてもできる限り、中部圏の課題を中心にという議論を踏まえ「リニア中央新幹線と交通権」としました。

参加者は、遠方からの参加者も多く、また、愛知県、岐阜県、三重県の研究者を始め学生、住民運動や労働組合の関係者、法律事務所など幅広い方々の参加と若い研究者の新規入会と発表で「交通権」を身近に感じる議論が広がった大会ではなかったかと思います。多くの方々のご理解とご協力に事務局を代表として感謝申し上げます。（文責 可児紀夫）